



「なごや歴まちびとの会」

日時

平成 26 年 2 月 18 日 (火) 14 : 00 ~ 15 : 45

知恩院御影堂修復工事現場  
見学会報告書

場所

京都市東山区林下町 400

ち おんいんみえいどう  
知恩院御影堂

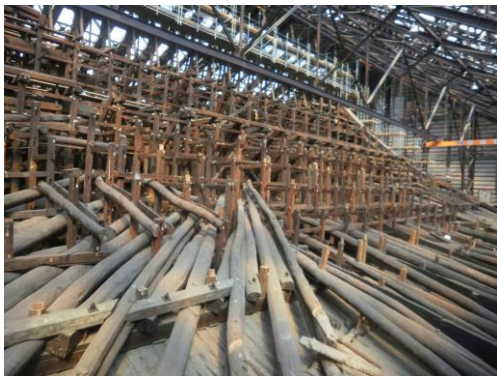


「タンタンタン」小気味良く木をたたく音が響く。寒風の中、雪花がふわふわと舞い降りる外とは違い、大きな素屋根に守られた御影堂は、瓦・土居葺・野地板・垂木が外され約 400 年の重りを外し、その大きな小屋組みを現し佇んでいた。柱間は正面 11 間およそ 45m、奥行 9 間およそ 35m と国内木造建築物の中でも 5 番目の大きさを誇り、平面は手前 3 間分を畳敷きの外陣とし、その奥の正面 5 間・奥行 5 間を内陣としている。見学した知恩院は浄土宗総本山の寺院であり、法然上人の像を安置している国宝御影堂は寛永 10 年(1633)に大火に見舞われ、寛永 16 年 (1639) に建てられた。過去大きな修理は、元禄 15 年 (1702) と明治 43 年 (1910) であるが今回の修理は平成 30 年まで続くという。

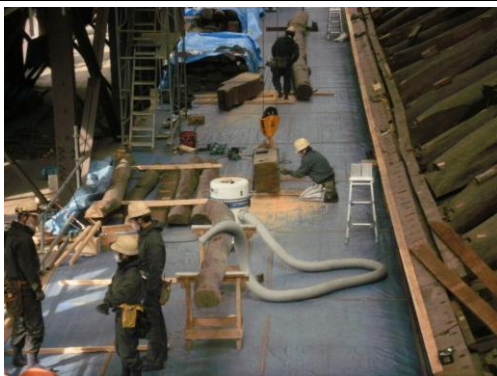


今回我々を迎えて頂いた、京都府教育庁指導部文化財保護課の浅井健一氏による解説を伺った。まず、敷地の狭いところでこの大きな鉄骨のフレームをスライドして囲った高さ 45m の素屋根の話や、七不思議になっている正面軒裏の「忘れ傘」は傘の骨だけの状態で実際にあった話を伺った。

今回の見学で面白いのは明治期の改修で小屋組の中に大きな斜材を入れて大規模な補強を加えている点と、軒の狭い空間には大多数の桔木を取替え、細いものは重ねて、太い松の桔木を多く入れ、国内屈指の建築物の軒を支えた源を見学できた点である。特に支点の様子を質問してみると、軒先端の下がり大きいもので 10 センチ下がっていたようだ。また小屋組みの中には多くの金物が使用されて桔木の固定金物は、ねじ式の明治期のものと楔式で留めるそれ以前のものがあり、改修当時の先端の技術が使われていたことが分かった。



平瓦は 1 枚 8 キロ、丸瓦は 1 枚 5 キロとかなり重く大きな瓦が使われ、今回の改修で打診により再利用できるか判断しているという。土居葺の板は厚み 24 ミリで雨が入ったときに表面を流れる様に 1 枚 1 枚丁寧に鉋が掛けてあり技の一端を垣間見えた。



今回 400 年近くの歴史の重みと建物の重さを支えてきた小屋組みや桔木の一つ一つを直接見ることが出来た。時の重みに耐える技術は、木組の技に重ねられる改修の技も含めてつながっていくもので調和の音が重要だと感じさせていただいた見学会であった。36 名の参加者にご説明頂いた浅井様はじめ京都府教育庁指導部文化財保護課の関係者の皆様、企画担当の皆様、ありがとうございました。

なごや歴まちびと 後藤 文俊